



校長から宗高・宗中のみなさんへⅡ ㊶

令和2年11月6日（金）

「アメリカ大統領選挙」

昨日の第6・7限は、高校の「総合的な探究活動」2年生発表が行われました。

2年生のみなさんが、十分に調べた内容を、それぞれ工夫を凝らしたスライドとしっかりとした原稿を準備してプレゼンに臨んでいる様子をととても興味深く（面白く）見せてもらいました。なかでも、テーマ設定は、ごく身近なものから、哲学的なもの、社会学的なもの、さらには歴史的なものや自然科学分野のもの多岐にわたっていて、みなさんの柔軟でユニークな発想力に感心させられました。中には「朝課外改善計画」や「眠たくなる授業と眠たくならない授業の違い」といったテーマもあり、思わず苦笑いしながらも、私たちがちょっとドキッとさせられるものまでありました。深めていけば、十分に大学レベルの論文にまで発展するテーマもいくつもあるように思いました。

昨日は、ほとんどの人が準備した原稿を読んで発表していましたが、聴いている人がわかりやすいビジュアルなスライドを更に工夫し、原稿を読まずにそのスライドと聴き手を見ながら発表できるようになると、説得力がぐっと高まり、プレゼンが飛躍的にレベルアップすると感じました。

とても興味深いテーマ・内容のものが多いだけに、プレゼンのレベルアップとこれから論文作成に向けた仕上げによって、高校2年生の「総合的な探究活動」は素晴らしいものになる！と確信しました。高校2年のみなさんのこれからの取組に大いに期待し、楽しみにしています。

また、昨日は「聴き手」として参加していた高校1年生のみなさんは、先輩の発表を参考にして「自分だったらどんなテーマにして、どうするだろう？」という観点でこれからの「総合的な探究活動」の取組について、友だちとも語り合いながら、じっくり考えてほしいと思います。

さて、11月3日文化の日は、アメリカ合衆国の大統領選挙投票日でしたが、（日本では考えられないことですが）3日目の今日11月6日現在、まだ当選者の確定に至っていません。それどころか、トランプ大統領は、選挙で不正が行われていると主張し、投票結果の集計の差し止めを求めて

いくつもの訴訟を起こす等、選挙結果がいつ確定するのか、全く予断を許さない状況になっています。こうした状況の中、トランプ、バイデン両候補者のそれぞれの支持者同士の対立も激しくなり、銃で武装して集会に参加する人たちが出てきたり、両者が衝突して怪我人が出る事態まで発生しています。トランプ大統領の言動によってアメリカ社会の「分断」が深刻化していると言えるのではないのでしょうか。

「格差社会」を背景にした（利用した）こうしたトランプ大統領のやり方は、20世紀前半のドイツにおけるヒトラーのユダヤ人差別・虐殺やわが国のヘイトスピーチ等にも通じるものを感じ、アメリカは一体どうなるのだろうか？ 日本は大丈夫だろうか？ と危機感を持たずにはおれません。

スペインの哲学者、オルテガ・イ・ガセットは『大衆の反逆』（1930）の中で『文明』とは**共同生活への意志のことである。敵とともに生き、反対者とともに統治することができるというのが『文明』の目標である。**と述べています。このオルテガの主張を受けて、思想家の内田 樹氏は『文明』の反対概念が『野蛮』である。野蛮とは『分解への傾向』のことである。人間が分散し、たがいに分離し、敵意をもつ小集団に社会が分断されるのが『野蛮な時代』である。政治的対立と国民の分断を私たちは『ふつうのこと』だと思っているけれども、オルテガはそれこそが『野蛮』だと言うのである。」と述べています。今、アメリカ社会で起こっていることは、まさにこうした『野蛮』な状況と言えるのかもしれない。

わが国のヘイトスピーチ等を含め、なぜ、世界的にこうした現象がみられるようになったのでしょうか？ オルテガは、「それは『他者と共生する』ということの大切さを忘れたからだ。『理解も共感も絶した他者』とでも私たちは場を共有し、折り合いをつけ、場合によっては協働して、何か価値あるものを創り出すことができる。それが『文明』というものだ。」とも述べています。

「分断」が進んだ、「野蛮」化した社会では人々は次第に「共同生活への意志」を失い、「他者と共生する」能力も衰えていってしまいます。そんな「野蛮」な世界や日本には決してしないために、これからのみなさんたちに課せられた使命は大きく、その使命を果たすためにも「課題探究」や「課題解決」の学びは大切なのだと思います。

校長 深瀬 信也